大学教育開発也少多一通信





CONTENTS

特集	大学教育開発センターの取り組み 特に5つの取り組みより報告します 「1第1回龍谷大学FDフォーラム	2
	第1回龍台大学FDフォーラムを終えて 大学教育開発センター長 近藤久雄参加者の声 渡部憲一(文学部教授)/中川孝博(法学部助教授)/ 鈴木裕樹(教学部(文学部)職員)/福田哲也(文学部2回生)/ 真鍋陽子(文学部2回生)/平野陽子(文学部2回生)	
	[2公開授業 後期に2つの公開授業実施 大学教育開発センター長 近藤久雄 参加者の声 鈴木智也経済学部助教授	6
	③学生による授業評価調査(授業アンケート)	8
	授業アンケート集計表の読み方と活用法 4FDサロン	9
	開催状況、FDサロンリポート [5]指定プロジェクト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
FD活動紹	↑ ····································	12
お知らせ	パソコン講習会/新着図書/おすすめの一冊 2006年度大学教育開発センター事業計画 2005年指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会 第11回FDフォーラム ((財)大学コンソーシアム京都主催) 他編集後記	15



大学教育開発センター通信 第11号

■発 行 日:2006年1月31日

■編集・発行:龍谷大学 大学教育開発センター 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 TEL (075) 645-2163 FAX (075) 645-2190 http://www.ryukoku.ac.jp/fd

■発行責任者:近藤久雄

Special Report

第1回能谷大学FDフォーラム

第1回龍谷大学FDフォーラムを終えて

大学教育開発センター長 近藤 久雄

以FDフォーラム実施にいたる経緯

龍谷大学大学教育開発センターは、今年 度で設置から5年を迎えました。大学教育 開発センターには設置のとき以来、大きく 三つの機能が与えられています。それは「教 育活動支援機能」「教育研究·開発機能」「FD 活動啓発機能 | の三つです。現段階ではま だ、こうした機能が全て十分に発揮されて いるというわけではありませんが、年を追 うごとに龍谷大学の教育改革を推進するセ ンターとしての歩みを進めています。

ところで、上にあげた三つの機能のうち、 とりわけ「FD活動啓発機能」は、学内に FD活動の種をまき育てて行くという重要 な機能であろうと考えております。大学教 育開発センターでは、この5年間に「FD 活動啓発機能」の具体化として、年間数回 にわたり「FDサロン」を開催してきました。

「FDサロン」では、まず学内から話題提供者を募り、 具体的な授業の苦労話から龍谷大学が現在抱えている教 育上の問題、果ては日本の大学教育を中心とした高等教 育全体の問題まで、幅広く自由に議論をしています。「FD サロン」の議論への参加は自由であり、大学教育開発セ ンターの事務局が用意した茶菓をいただきながら、その 時々の話題提供者を囲んで、文字通りサロン風に活発な 教育の議論を行っています。議論の内容は、後日『FD サロン・リポート』として学内に配布されて、様々な事 情で当日参加できなかった学内の人々にもその議論の内 容が伝わるようにしております。

とりわけ今年度は、「評価」「改革」等々の掛け声の下 に推し進められている高等教育の流れを、一度ゆっくり



と考え直してみようではないか、という声が大学教育開 発センター運営委員の先生方の間から起こり、そもそも 現代における大学教育とは何かを考えてみようというこ とになりました。そこで「FDサロン」には年間統一テ ーマを掲げることとし、そのテーマを『21世紀の大学 とは何か』としました。既に6回の「FDサロン」がこ の統一テーマの下に開催されています。

こうした「FDサロン」に加えまして、本年度は「FD フォーラム」を新に「FD活動啓発機能」の具体化とし て実行することができました。「FDフォーラム」は事業 計画としては既に過年度から挙がってはいましたが、実 行されないままに置かれていました。今年度は「FDサ ロン」の統一テーマが『21世紀の大学とは何か』であり、 大学教育開発センターでは、いわばこの一年間にわたっ

第1回龍谷大学FDフォーラム

- 21世紀に対応できる大学教育の創造
- ●シンポジウムテーマ 学士課程教育 (undergraduate education) の創造
- ●日 時

2005年12月3日(土) 13:30~17:30 情報交換懇親会 17:45~19:00

●会 場

深草学舎 紫英館2階 大会議室



藤田国際基督教大学教授

グローカル化時代の大学教育―教養教育の在り方を中心に― 講演者:藤田 英典(国際基督教大学教授)

研究は一、成は一、大学には一点では、教育の英国民会議委員、 中央教育審議会義務教育特別部会の委員、 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業委員会委員、 元日本教育社会学会会長、他

第Ⅱ部 シンポジウム

学十課程教育 (undergraduate education) の創造

学校インターンシップと「学びの自覚」 芝井 敬司 (関西大学文学部長)

「なぜ学ぶのか?」の疑問に答える学士課程教育の必要性 吉田 真(立命館大学教養教育センター長)

龍谷大学での「全学教育改革」の取り組みと現状

藤田 英典 (国際基督教大学教授)

司会: 近藤 久雄 (龍谷大学 大学教育開発センター長)

第Ⅲ部 情報交換懇親会

て大学教育とはそもそも何であるのか、これからの龍谷大学の教育のあり方は如何にあるべきかといった問題を考えてきたわけであります。そこで、そうした年間活動のいわば総仕上げとして、「第1回龍谷大学FDフォーラム」を実施し、テーマは「FDサロン」のテーマを受けて、『21世紀に対応できる大学教育の創造』とすることとし、実施日を12月3日として準備に掛かりました。

以FDフォーラム(基調講演)

今回の「FDフォーラム」のテーマ『21世紀に対応できる大学教育の創造』は、先にご紹介申しあげました「FDサロン」の年間統一テーマ『21世紀の大学とは何か』とも深く関わっていることは先に述べた通りです。科学技術の発達に伴いグローバル化してゆく現代社会、ユニヴァーサル化した今日の大学の抱える問題等を念頭に、大学教育の意味を考え、その新しいあり方を探ってみようということで掲げられたテーマであります。

今回は、基調講演を国際基督教大学の藤田英典先生に お願いいたしました。藤田先生は元東京大学教育学部長、 教育改革国民会議委員、中央教育審議会委員等の社会的 なご活躍のみならず、ご著書の中では、最近のいわば新 自由主義的なものの考え方が無批判に教育の世界に入り 込んでくることの危険性について鋭いご指摘をされてい ます。基調講演では、『グローカル化時代の大学教育― 教養教育の在り方を中心に―』ということでお話しをい ただきました。このテーマは龍谷大学の第四次長期計画 で掲げた龍谷大学像であります「共生をめざすグローカ ル大学」とも通じるところのテーマであります。もちろ ん藤田先生は龍谷大学のそうした事情などはご存じない ままに、グローバル化してゆく現代社会のなかで、近年 OECD等の国際機関でも21世紀の大学教育のあり方を 考えるキーワードとして用いられてきた「グローカル」「共 生」といった用語を使って、今回の講演のテーマをお考 えになられたものです。以下に、藤田先生ご自身にお書 きいただいたご講演の主旨を引用しておきます。

「グローバル化時代、知の大競争時代などと言われる 時代状況の中で、大学教育の在り方が改めて問い直され ている。その時代の変化と課題に大学はどのように対応 していくのか、どのような大学教育の未来を構想し実現 していくのかについて、グローカル化をキーワードとし、 学部教育・教養教育の在り方を中心に考えてみたい。グ ローバル化の重要な特徴は、知識・技術・資格・ルール のグローバル・スタンダード化が進むということである。 もう一方で、多文化主義や多文化共生(多民族共生を含 む)もグローバルな規範・理念となりつつある。それは、 多様なローカル・カルチャー(国民文化を含む)の尊重・ 維持と共存・交流を促進する動きとして展開し、また、 ローカルな文化・社会の活性化を図る動きも盛んになっ ている。この二つの動きが同時進行するグローカル時代 にあって、そこで期待される教養とはどういうものか、 大学における教養教育の課題はどういうものかを、学問・ 研究の専門分化・高度化・学際化とパラダイムの転換、

及び大学教育の大衆化と大学教育に対する学生・社会の 期待・ニーズの多様性を踏まえつつ考えてみたい。」

以FDフォーラム(シンポジウム)

藤田先生の基調講演を受けて、それに続くシンポジウムは、関西大学文学部長芝井敬司先生、立命館大学教養教育センター長吉田真先生、龍谷大学教学部長赤松徹真先生をシンポジストとして、『学士課程教育(undergraduate education)の創造』をテーマに行われました。なお、藤田先生には引き続きコメンテーターをお願いしました。

芝井先生は関西大学文学部で「学校インターンシップ プログラム」を実施され、関西大学文学部改革の中心的 存在としてご活躍をされています。また、吉田先生は、 危機的な状況にある教養教育の現状を憂えて、2005年1 月22日に立命館大学におきまして『京滋私大の教養教 育はいま』というタイトルでシンポジウムを開催されて います。その時のメンバーは、立命館大学キャリアセン ター部長平井孝治先生、京都産業大学全学共通教育セン ター長市川貢先生、京都嵯峨芸術短期大学部佐野仁志先 生、龍谷大学上垣豊先生、それに吉田先生ご自身でした。 今回のFDフォーラムのシンポジウムは、吉田先生が昨 年度実施されたシンポジウムを内容的に継承したもので す。もうひとりのシンポジスト赤松先生は、現在龍谷大 学の教学部長として全学教育改革の議論の責任者であり、 教養教育、語学、教育システム等々に関する議論を統括 する立場にあります。

芝井先生と吉田先生には、それぞれ「学びの自覚」と「なぜ学ぶのか?」という視点からご報告をしていただきました。芝井先生は、関西大学で実施している「学校インターンシッププログラム」が、どのようにして学生



会場からの質問を受ける藤田国際基督教大学教授

さに龍谷大学も含めたユニヴァーサル化した現代の大学 教育の抱える深刻で最重要の問題であります。最後に本 学から現在赤松教学部長の下で進められております龍谷 大学の「全学教育改革」の議論について、赤松先生ご本 人から報告していただきました。

主催者であります大学教育開発センターとしましては、シンポジウムでの芝井先生と吉田先生のご報告から、現在赤松教学部長を中心に進められています龍谷大学の「全学教育改革」の議論のために貴重な示唆をいただけたのではないかと密かに自負しております。



□結び

現在、大学は「改革」という威勢の良い言葉のもとに、次々と新たな動きをいわば外からの力で強いられています。しかしながら、注意してその「改革」という言葉の背後にある思想を見てみると、「市場原理」や「競争原理」、それに「成果主義」「効率主義」といった言葉に象徴的に表れている価値観、すなわち、新自由主義あるいは新保守主義の価値観でありイデオロギーであることに気がつきます。

日々教育に携わり、真面目に「人を育てる」努力をしている私達は、教育は地味で忍耐のいる仕事であること

は誰よりも知っています。そうした立場の人間から見ると、教育にはそうしたイデオロギーには馴染まない側面があることは良く分かります。競争原理で決まっているあの特色GPでさえも、その実施委員長の話によると、その判断基準は「当たり前のことを、当たり前に積み上げてください」ということです。教育においては、日々の平凡ではあるが堅実で地味な実践の積み重ねが大事であるということなのでしょう。このフォーラムを切掛けとして、龍谷大学に21世紀を見通した、水準の高い教育論が起こることを念じております。

最後に僭越ではありますが、今回のフォーラムを実施 する過程で出会った書物を紹介して、学内の皆様の教育 談義のお役に立ちたいと思っております。

蓮實重彦/アンドレアス・ヘルドリヒ/広渡清吾 編『大学の倫理』東京大学出版会 (P14新着図書で紹介)

「第1回龍谷大学 FDフォーラム」に参加して

文学部教授 渡部 憲一

自分の講義が独りよがりになっていないだろうか、という一抹の不安が頭をよぎるようになった頃、「FD」が膾炙され始まりました。それ以来、「FD研究会」には何度か顔を出すようになりましたが、なかなか納得できる「答え」に出会うことはありませんでした。私の些細な体験のなかで一貫して語られてきたことは、「大学が変わった」、「学生が変わった」ということです。とりわけ学生の「学力低下」は、深刻な問題の一つとして指摘されてきたように思います。

ところで、これまでの教育を乱暴に言ってしてしまえば、それは、「既存の知」を伝達するだけで充分だったはずです。しかし、いま学生に突きつけられていることは、「新しい生の創出」とでもいうような課題です。それは、暴力や抑圧、環境汚染、高齢化社会、多様な文化

との共存などなど、いずれも人間が未だ経験したことのないことばかりです。そんな問題を突きつけられた学生が事柄の深刻さにたじろいでしまうのは無理からぬことです。そのようなことを反映してか、他人や社会の出来事から身を引き離すことをアイデンティティーとする学生たちが増えてきているのも事実のようです。学生の変化を「学力低下」と単純化するわけにはいきません。いまを生きる学生に、さまざまな事柄とその緊張関係とを自らの内に取り込むことを可能にするなる、なんらかの手がかりが与えられるなら、学生の「たじろぎ」も変わることでしょう。

今回の「FDフォーラム」では、学生の「たじろぎ」に直接手をさしのべる優れた試みを聞くことができ大変参考になりました。しかし、これとても、私の教育に直接重なり合うものではありません。重要なことは、変化した状況を共有するものたちが、「たじろぎ」を克服するために持続的な取り組みを保証するシステムの構築だと考えるのです。それぞれの報告者の言下に、「個人的努力だけでは限界がある」と聞いたのはうがち過ぎだったでしょうか。

大学教育の創造を担う 当事者として

法学部助教授 中川 孝博

私は法学系教員なので、教育のあり方についても法学 部や法科大学院に特化した議論に触れることが多くあり ます。しかし、その議論はあまり面白くありません。お そらく、学修の主体である学生や社会の現状を分析せずに、教育目的・内容の大枠がア・プリオリに設定されるからでしょう。扱っている学問が規範学中心であるせいか、法学系の教員は、存在よりも当為を重視するのです。

これに対し、法学以外の研究に従事しておられる教員 諸氏の議論は面白く感じます。現在の学生がどういう状 況におかれ、どういう問題を抱えているかを分析しなが ら、教育目的や教育内容自体を前提から問い直す、真摯 で柔軟な姿勢がみられるからです。

今回のシンポジウムもたいへん勉強になりました。藤



近藤龍谷大学大学教育開発センター長(右)

田英典氏は、諸外国における学生の大学教育に対する意識調査等を紹介されるなどしたうえで、大学教育改革の指標と改革のための条件を呈示されました。芝井敬司氏は、インターンシップの取り組みを例に、学生の主体性を掘り起こす方策につき示唆を与えられました。吉田真氏は、カリキュラム改革の取り組みを例に、全学的連携が十分でない中での制度改革の困難さ、そして学生の動機付けを中心とした教育方法の重要性について問題提起されました。

これらの主張を拝聴し、「学生が他者や社会に眼を開き主体的に学修するために、大学教育はどのように貢献すべきか」という問題設定の重要性をあらためて確認しました。現場に立つ私としては、第三者的にコメントを述べるのではなく、教育成果でもってお返ししたいと思

います (赤池一将=中川孝博『刑事法入門』[法律文化社・2006年] 参照)。みなさんが何を考え、どのような実践活動をされているのかは、エピソードを散発的に聞いたり、1回授業を参観したりするくらいでは十分に明らかになりません。授業内容がよくわかる、このようなテキストが多数発行され、それを熟読するほうが私にはわかりやすいし、議論もしやすいと考えます。この種の試みが簡単にできるような支援システムがあれば、と思います。

FDフォーラムに参加して ~学びの動機付けがキーワード~

教学部(文学部)事務職員 鈴木 裕樹

日本私立大学連盟が4年ごとに実施している学生生活実態調査の中に、「講義への要望」「教育内容・方法への期待」というFDに関する項目があります。全国の学生を対象に2002年の秋に調査されていますが、結果をみると、「多様な科目選択ができるカリキュラム」を期待する意見が最も多く、しかもその割合は突出しています。別途、龍谷大学でも、本学生のみを対象とした調査を同時期に行っていますが、同じ質問に対し連盟のものと全く同じ傾向がでています。私は現在文学部を担当してい

ますが、文学部のカリキュラムに鑑みると、この調査結 果には非常に戸惑いを覚えました。文学部には9つの学 科専攻がありますが、1996年度にカリキュラム上の垣根 が取り払われ、学生はどの学科専攻の授業でも履修でき るようになりました。選択できる科目の領域が大きく拡 がったわけですが、調査結果で「多様な科目選択」の要 望が多かったことは、どのように捉えたらよいのでしょ うか。学生にカリキュラム改革の趣旨が理解されていな いのでしょうか。今回FDフォーラムにおいて、シンポ ジストの先生方より、学生の自主性、参加性の重要性や、 学びの自覚を持たせる工夫が紹介されましたが、ここに 疑問を解くヒントがあったような気がします。ただ単に 学生のニーズだけを追いかけても、学生の満足度は向上 しないのではないでしょうか。今後は、学生に学修に対 する動機付けを喚起させるような環境づくりが必要であ ると感じました。有意義なフォーラムに感謝いたします。

学生も参加しました!

文学部2回生 福田 哲也

FDフォーラムの懇談会のときに、 藤田教授に「今の学力低下について どう思いますか」という質問をしま した。藤田教授の答えは、今は大丈 夫だが、将来的に2点の問題がある と言われました。1点目に科学の分 野ではトップの人たちはあまり変わ らないが、トップの人たちとトップ を支える人たちとの差が拡がる恐れ がある。2点目は、支える人たちが 日本では先日のフランスまではいか ないが社会的排除の力が加わり、暴 徒化してしまう恐れがあると言われ ました。学力の格差については、僕 は日頃からできる子とできない子の 格差について感じることが多かった ので、なるほどと感じました。

文学部2回生 真鍋 陽子

シンポジウムを聞いて、日本は 他の国に比べて一般教養を小学校 から大学まで長く教えているとい うことがわかり、日本も早いうち から専門技術を学ぶようにすれば フリーターが減るのではないかと 思いました。単純すぎるとは思い ますが、自分が何を一番したいの かわからずにフリーターをしてい る人には、ある程度の強制力をも って一つの道に進んだほうが、い つまでも一般教養を学ぶより自分 のしたいことを決められるのでは ないかと感じました。その他、シ ラバスの話は実際自分が持ってい るので興味深く聞くことができ、 貴重な体験ができました。

文学部2回生 平野 陽子

藤田先生の資料で、教養に重点を置 くか専門教育に重点を置くか、国によ ってかなり意識に開きがあるのがおも しろいです。私個人は、大学に入るま で、大学は専門教育を受けるところで、 足りない教養は自分で補うものと漠然 と考えていましたが、今まで興味のな かった分野でも、大学の講義を聴いて おもしろいと思ったことがあります。 しかも自分の学びたい分野と大きく関 わっていたりします。吉田先生がおっ しゃってましたが、確かに、授業で課 題を出されてある程度義務感を持たな いとなかなかやったことのない事は始 められません。教養の講義がおもしろ ければ、重点の置き方も変わるのでは ないでしょうか。

大学教育開発センターの取り組み②

公開授業

大学教育開発センター長近藤 久雄

後期の公開授業は経済学部の岡地勝二教授と国際文化学部のジョーナ・サルズ教授にお願いをして、それぞれ10月4日火曜日の4講時『国際経済学』』と11月8日火曜日の4講時『芸術研究入門C(演劇)』の授業で実施しました。公開授業と同じ時間帯に自分の授業があったり、会議その他で多忙であったり等、様々な理由で参加者は今までの公開授業同様数名でしたが、ご担当のお二人はそれぞれに創意工夫をされており、お二人のご努力には他の先生方にもご参考にしていただける点があるように思いました。



岡地教授にお願いしたのは、授業の中でのゲストスピーカーの活かし方を見せていただきたいということでした。折りしも、オーストラリアからデイビッド・ウエスタン カーティン工科大学助教授がレクチャー・ツアーで龍谷大学経済学部にお見えになっており、今回の公開授業の実現となりました。『国際経済学 II』のクラスの規模は350名程度であり、授業は岡地教授によるユーモラスなウエスタン助教授の紹介から始まりました。ウエスタン助教授の授業は全て英語で行われました。ウエスタン助教授が5分から10分ほどゆっくりとした英語で話しをされると、その後岡地教授がウエスタン助教授の話しの要約を日本語で行うというやりかたで授業は進められました。ウエスタン助教授の講義はWhy Japan has Endured Such a Prolonged Recession? というテーマ



10月4日(火)4講時 『国際経済学Ⅱ』 岡地 勝二(経済学部教授) 深草学舎21号館604教室

デイビッド・ウエスタン カーティン工科大学経済学部助教授(右)。時折、ウエスタン助教授が学生に質問を投げかけると、岡地教授(左)は学生達の間を歩きながら彼らを励ましつつ通訳をした。

で、学生にとっては難しいと思われる内容でしたが、具体的な事例について話しをすること、質問を引き出すために、親しみやすい教室の雰囲気をつくる努力をされていることが授業参観者にもよくわかりました。

ウエスタン助教授が話し終えても、残念ながら学生から質問は出なかったのですが、岡地教授とウエスタン助教授が学生を指名して質問を引き出し、うまくディスカッションに持っていくやりかたは、英語圏の大学で教育を受けたお二人が自然に身につけた授業のスタイルであろうと思われます。筆者は教育の基本は学生と教員とのコミュニケーションであると考えていますが、そうした視点でゲストスピーカーが授業の中で活躍できる条件を考えて見ますと、担当教員とゲストスピーカーとが互いに親しく、いわば「阿吽の呼吸で」授業を作り上げていくだけの人間関係ができていることが大事であるように思われます。

知識を教え込むのではなく、感じさせ 考えさせる工夫のなされた授業

サルズ教授にお願いしたのは、演劇的な手法を取り入れた授業を見せていただきたいというものでした。そもそもサルズ教授自身が演劇の専門家であり、教室をひとつの演劇空間としてとらえ、演劇のパフォーマンスやプロデュースを意識した授業を展開されていることは予想されることでしょう。

クラスの規模は120名程度で、まずは前回の授業で学生達に課しておいたTheater Reportの提出から授業が始まりました。指定された芝居を見てレポートを提出することが求められていたようです。内容的には、学生が書きやすいように作成上の視点やポイントはかなり具体的に前もって示してあったようです。それでも提出していない学生に対しては、「まだ見ていない人は立ちなさい」

といってその場で起立させ、その間にサルズ教授は学生 の間を質問したりしながら歩き回り、話しを続けました。

興味深いのは、サルズ教授がいわゆる「教壇」でしゃべることは無く、常に学生の間を歩きまわりながら話しをすることと、立たせたり声を出させたり学生達に常に身体を動かすことを要求していることでした。つまり、学生達が受動的に授業を聴くのではなく、演者の一人として授業の中で役割を演じさせることを求めているということです。

こうしたサルズ教授の姿勢は、授業の後半になるともっとはっきりしてきました。まず、サルズ教授自身が前もって編集をされていた、様々な映画の中に出てくる様々な役者の表情のビデオを見せて、学生達に短い感想やコメントや分析を書かせます。今回は演劇の舞台での役者の表情が授業のテーマでしたが、こうした短いコメントは毎回書かせており、TAを使って添削をして翌週に学生達に返却しているとのことでした。

面白いのは、この授業の最初からTAが教室の様子をビデオカメラに撮っており、ビデオに収めた学生達の様々な表情が、先に述べた演劇の舞台での役者の表情を編集したビデオとともに学生達に示されることです。自分達の姿をビデオで見せられた学生達は、知らず知らずのうちに教室という演劇空間に引き入れられているようでした。

授業はこの後、演劇表現と役者の表情の話題になり、 最後に日本語訳の『マクベス』の台詞を全員で声を出し て読み、次に同じ箇所を読む役者のビデオを見せて比較 し考えさせた後で、再度全員で声を出して読ませました。



つ業じでううたではといいでるもとに思りませるもとに思いましまりのをといれにこかはないましまの題がある。



11月8日(火) 4講時 『芸術研究入門C(演劇)』 ジョーナ・サルズ (国際文化学部教授) 瀬田学舎3号館106講義室

教科書として日本語訳の『マクベス』を持ってきた学生を立たせて台詞を音読させている。教科書を持ってきていない学生は、スクリーンに映し出された教 科書を見て読むために、前に集まるよう指示が出された。

エッセイを書くことを宿題にして授業は終わりました。

知識を教え込むのではなく、ことばや表情で表現することを体験させ、演劇の持つ意味を感じさせ考えさせる工夫のなされた授業であるという感想を持ちながら公開授業を終えました。

公開授業の目的、 それは授業の画一化ではなく

大学教育開発センターでは、様々な工夫をしておられる授業を取り上げて、その都度テーマを掲げては公開授業を行っています。それは、決して模範的な授業を取り上げて宣伝するためではありません。いうまでもないことですが、授業のスタイルは科目や担当教員の個性によって様々であり、一概にこれが良い授業であるとか、これが模範的な授業であるなどといったことを言うのは不可能です。また、仮に模範的な授業などといったものを提示して、それを広めようなどと考えると、それは授業を画一化し教員の個性や工夫や努力を損ねてしまい、結果的に教育を崩壊させかねません。授業を公開し教室での工夫を見せ合うことは、教員の日々の努力を助けるひとつの手段として、教員間の情報交換のひとつであろうと考えています。

公開授業参加者の声

経済学部助教授 鈴木 智也

さる10月4日、岡地先生の公開授業が行われました。講師はカーティン工科大学のデイビッド・ウエスタン助教授。

私は龍大赴任前にオーストラリアの大学で働いておりましたので、ウエスタン助教授とは面識があり、彼の講演に顔を出すことにしました。

講演の内容は日本の経済全般に関わることでした。そのような広いトピックを選んだ場合、内容が散漫になりがちですが、ウエスタン助教授は学部生に理解できる内容をうまく手短にまとめていらっしゃいました。さらに、日本経済に関する事実の列挙にとどまらず、彼自身の見解が強調されていたのは、

とても良かったと思います。これによって、議論をする余地が生まれ、学生側からすれば、黙って聴くだけという受動的な講義スタイルから脱却できたのではないでしょうか。また、ウエスタン助教授の言葉を適切なところで区切って通訳するという、岡地先生のスタイルは学生の理解を助けていたと思います。時折挟まれるジョークも適時通訳されて、学生はリラックスして聴講できたことでしょう。今回のように、他国の大学の教員が現地の言葉で講演するのを聴く機会は、学生にとって貴重な経験になると思います。(実はウエスタン助教授には翌日、私の担当する別の講義にも友情出演していただきましたが、受講生には大変好評でした。)

今回の公開授業が聴講生の全てとはいわないまでも、少な くとも一部にとっては、日本の外の世界にも目を向けるきっ かけになったものと信じます。

学生による授業評価調査(授業アンケート)

授業アンケート集計表の読み方と活用法

今年度から「学生による授業評価調査(授業アンケート)」の集計表(分析結果の表示方法)が大幅に改善されました(下図を参照)。今回の改善にともない、各教員から様々な反応がありました。これは、「集計表を見やすいものに、多くの教員が活用できるように」との目的を達成する声として、うれしい限りです。そして大学教育開発センターには「集計表のこの箇所は、どのように解釈すればよいのか」という質問も寄せられています。そこで、集計表をうまく読んで、これを活用する3つのポイントを説明します。

ポイント 7 評価の読み方(絶対的評価)

学生は、それぞれの質問項目にたいして、5段階(5「強くそう思う」~1「全くそう思わない」)で回答しています。集計表には、回答者全員の平均値が項目ごとに記載されています(図表1)。この数値が評価得点(5点満点)で、5に近いほど評価が高く、1に近いほど評価が低いことを表します。

ポイント 2 評価の読み方(相対的評価)

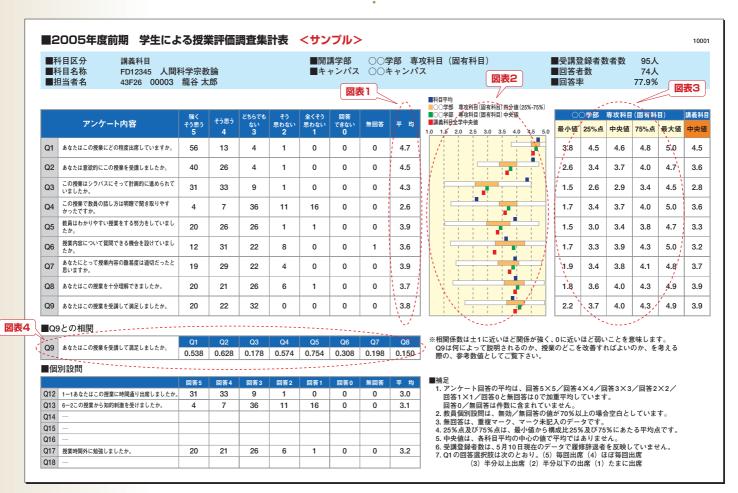
同じ評価得点でも、比較する母体(学部や質問項目)によって、評価得点の中心やバラツキの度合いは様々で、実質的な評価は異なってきます。集計表では、「箱ヒゲ図*」(図表2)を使って、このような相対的な評価をわかりやすく伝えています。これを用いると、自分の授業

の項目ごとの評価得点が、学部または外国語科目全体の 中でどの辺りに位置するのかを視覚的に読みとることが できます。

自分の授業の評価得点(紺色の■)が

- (1) 黄色の範囲内に位置する→他の科目とほぼ同じ
- (2) 黄色の範囲より右(白抜きの部分)に位置する →他の科目より高い
- (3) 黄色の範囲より左(白抜きの部分)に位置する →他の科目より低い

サンプルの龍谷太郎先生の科目「人間科学宗教論」では、Q7 (授業内容の難易度の適切さ)の評価得点 (3.9)をしめす紺色の■は、図中の黄色の範囲内 (3.4~4.1)



に位置します。これにより「人間科学宗教論」は、難易度の適切さにおいて、他の科目とほぼ同じ程度の評価をうけていると考えられるでしょう。さらに詳細に見れば、紺色の■は中央値(3.8)を表す緑の■より右に位置しているので、(他の科目とほぼ同じ程度でも)真ん中よりやや高いということがわかります。

*箱ヒゲ図は最小値と最大値、それから3つの四分位点、計5つの点からなりたっています。四分位点とは、全部の観測値(ここでは比較対象科目全部の評価得点)を高低順に配列したときに、全体を4等分するなか3つの値(25%点、50%点=中央値、75%点)のことです。これら5つの点(図表3 表中の値はそれぞれ一つの科目の実際の評価得点)を基準に、自分の授業の評価得点が全体のどの辺りに位置しているのかを読みとります。

ポイント 3 Q9との相関

今回のアンケートには、授業の総合評価を問う質問項目 Q9「あなたはこの授業を受講して満足しましたか」を新たにくわえています。Q9は他の個別の質問項目(Q1~8)とクロスさせることで、授業改善のための貴重な情報源となります。それが「Q9との相関」(図表4)です。Q9との相関係数(つながりの強さを示す値)は、授業の総合評価は何によって説明されるのか、授業のどこを改善すればよいのか、を考える際の参考数値として役立ちます。

サンプルの「人間科学宗教論」では、Q9との相関がもっとも強いのは、Q5「わかりやすい授業をする努力」 (.754) です。つまりこの授業の総合評価を一番大きく左右しているのは、わかりやすい授業をするための努力をしているかどうかという評価です。そのあと、Q2「意

欲的に受講していましたか」(.628)、Q4「話し方は明瞭で聞き取りやすいか」(.574)、Q1「どの程度出席していましたか」(.538)という順で、Q9と強い関係にあることがわかります。ただしQ2、Q1は授業改善に直結する質問項目ではないので、ここでは省きます。Q5の評価得点(3.9)は比較的高い(つまりQ5における他の授業の評価得点と比べて高い、また「人間科学宗教論」における他の項目Q3、Q4、Q6~8の評価得点と比べて高い)ので、改善の余地はあまりないかもしれません。それに対して、Q4の評価得点(2.6)は相対的に低いので、改善の余地が十分あるようです。龍谷太郎先生が今後この授業の改善をはかることは、第一にQ4の授業での話し方の工夫でしょう。このように、Q9との相関の情報を今後の授業改善に活用することが可能です。

注意していただきたいのは、この授業アンケートは、 決して教員個人の評価ではなく、改善を目的とした授業 の評価であるという点です。授業の総合評価や相対的評価を導入したのも、活用できる情報を提供するためです ので、ご理解ください。また集計表の評価得点はあくまでも参考数値にすぎません。得点には、授業の内容や形態、学生の構成、回答者数や回答率などが大きく影響してきます。以上のことを念頭において、各教員のみなさまには、この集計結果を適正かつ有効に活用されるようお願いします。

大学教育開発センター運営委員(教育活動評価支援プロジェクトメンバー) 津島 昌寛(社会学部助教授)、窪田 和美(短期大学部助教授)、 長谷川岳史(文学部助教授)

2005年度は、試みに年間テーマを決めて実施することにしました

~FDサロン番外編 職員のささやき~

FDサロンに参加してみました。始まるまでは音楽が流れ、中国茶を趣味にされている先生が、とても香りの良いお茶をいれてくださり、また、話題提供者の手作りパンにハムを添えて出してくださったのにはびっくりしました。毎回違ったお茶菓子が楽しみでもあり、話題提供者も国際色豊かで、それぞれ興味ある内容でした。意見交換もいろいろ飛び交って、あっという間の1時間半でした。

FDサロンが終わると豊かな気持ちになって、教養もレベルアップしたような……。ちょっと得した気分です。



また、話題提供の先生は、 日頃の先生とは違ってどの先生も緊張の面もちがかいま見られ、汗を拭き拭き部屋に入って来られたり、話題提供者の席で、始まる前まで落されたりない様子でモジされたのが印象的でした。 しかし、始まればどの先生も 堂々とお話しされ、特にネイティブの先生が、日本語で一 生懸命伝えようとしてくださったのには感動しました。

後日、『FDサロンリポート』が発行され、活字となって 読むことはできますが、LIVEのFDサロンには、活字に無い、 香りと味わいがあるように思います。

是非、FDサロンに参加してみられることをお勧めします。

第7回FDサロンを近々開催予定です。詳細は「大学教育開発センターNews」 等でご案内します。

『FDサロンリポート』 について…お知らせ

より多くの方々に内容を知っていただくため、『FDサロンリポート』を発行しております。

今年度の『FDサロンリポート』は、大学教育開発センター前に 置いておりますので、ご自由にお取りください。昨年度の『FDサロンリポート』は、大学教育開発センター内にございますので、係の者に気軽に声をかけてください。

第1回 6月7日(火) ●「アメリカのリベラル教育をめぐる3つの問題」

トム・ライト(経営学部教授)

7月5日(火) ●「ドイツにおける大学教育の変容過程」

ウェルホイザー・ナディア(経済学部講師)

第3回 7月12日(火) ●「Universities in England and Wales」

ロザーティ・サイモン(経済学部助教授)

第4回 10月4日(火) ● 「共生をめざす大学の学問論」 神子上 惠群(学長)

第5回 10月27日(木) ● 「経済学のFD」

小峯 敦(経済学部助教授)

第6回 11月17日(木) ● 「南方熊楠を教えた人々」

松居 竜五(国際文化学部助教授)

※なお、第6回の『FDサロンリポート』は現在制作中です。

指定プロジェクト

●テーマ「教育評価」より

東京農業大学での自己教育評価に ついてのヒアリング結果報告

指定プロジェクト「教育評価」共同研究者 短期大学部助教授 阪口 春彦

FD・教材等研究開発指定プロジェクト「教育評価」 における研究の一環として、自己教育評価を実施してい る東京農業大学を訪問し、そこで実施されている自己教



育評価がどのようなものであ るのかを把握するためのヒア リングを行いました。ヒアリ ングは、2005年9月1日に東 京農業大学世田谷学生サービ スセンターにおいて、同セン ター学習支援課﨑村徹課長に 対して筆者が行いました。

東京農業大学は1891年に 創立され、現在は農学研究科、 生物産業学研究科、農学部、 応用生物科学部、地域環境科

学部、国際食料情報学部、生物産業学部、短期大学部を 有していて、世田谷、厚木、オホーツクにキャンパスが あります。

教員の評価は研究業績のみで行われてきたが、研究業 績は不十分でもいい教員はいるとの認識が自己教育評価 導入の背景としてあったとのことです。このことから、 自己教育評価の目的は、研究業績だけでは評価すること のできない大学教員としての多くの活動を正しく評価す ることとされています。

自己教育評価における評価項目は、教育に関するもの が中心ですが、大学の管理・運営や研究に関する評価項 目も含まれていて、自己教育評価と呼ばれてはいますが、 教員評価であると言えます。評価項目は86あり、それ ぞれ「した|「しない|「該当しない」の回答選択肢があ ります。また、これら86の評価項目に該当しないこと

がらについては、自由記述することができるようになっ ています。

毎年12月に自己教育評価シート(OMR用紙)が配布 され、各専任教員(教授・助教授・講師・助手・有給副 手)がマークし、教育評価委員会で集計・分析されるこ とになっています。なお、虚偽の自己評価を防ぐ意味で も、証拠資料を提供してもらう場合があるということが、 自己評価の依頼文書に明示されています。

各評価項目において「した」とマークされた項目数を 全体の項目数で除し、100を乗じたものを自己教育評価 ポイントとしています。なお、評価項目ごとに重み付け はされていないため厳密性を欠くと言えますが、重み付 けを行うことは実際には非常に困難であり、このような 算出方法をとっているとのことでした。

自己教育評価の結果は、本人に伝えられるとともに、 昇格と他機関兼務の許可に活用されていて、今後は留学 やサバティカルリーブの審査にも活用される予定です。 昇格については、資格審査委員会からの要請に基づき評 価結果が提供されます。他機関兼務の許可については、 所属別(大学・短大・教養教職の3つに分類)・職階別 のグループの中で著しく平均を下回った場合のみ、資格 審査委員会の判断で、他機関兼務を許可しないこととし ています。

このように、評価結果は限定的に活用されていると言 えます。多くの場面で活用するためには、学生による授 業評価を含む多角的で、より厳密な教員評価を行う必要 があるが、そこまで至っていないからであるとのことで した。

東京農業大学が先駆的に教員評価を導入されているこ とは注目すべきことだと思いますが、それ以上に、現実 的な判断のもとに制度設計されていることや、評価結果 の限界を踏まえ評価結果の活用範囲について慎重な姿勢 をとっておられることに注目すべきではないかというこ とが、今回のヒアリングをとおして感じたことです。

※ヒアリングにご協力いただいた東京農業大学世田谷学生 サービスセンター学習支援課﨑村徹課長に心より感謝い たします。



センターの職員として、先生方と関わ る中で、この話は他の先生方にも役立つ のではないだろうかと考えることがたく さんあります。センターに立ち寄られた 先生の一言、FDサロン終了後の雑談の中、 こういった中から拾いあげた先生方の持 たれているひと工夫、みなさんにも紹介 できれば・・・このような思いから、こ のコーナーが生まれました。

学生のFD参画

昨今、他大学のFD活動の動向を見るときに、これまで教職員が担うことが当然と考えられ、また、 そうしてきた分野において変化が見られるようになりました。

例えば、カリキュラム改革やシラバス改革、またオーブンキャンパスや大学生活支援、地域連携ボラ ンティア等の企画・運営に学生が携わる大学が増えています。

本学でも月に1度程度行っているFDサロンや先に行われたFDフォーラムに数人の学生が参加してい ましたが、「もっと積極的に参加してもらってはどうか」、また、「授業評価調査(授業アンケート)につ いて学生と教職員が率直に意見交換を行える場を作ってはどうか」、等といったご意見を耳にします。

本学が教育改善に取り組む一つの方法に学生との関わりが近道になるのか、遠回りになるのか、果た して何も変わらないのか。いずれにしても何のためにそれを行う必要があるのか、また、どのように行 うのか等を話し合う時期が来たのかもしれません。

●テーマ「高大連携」より

指定プロジェクト「高大連携」は、10月12日に全学に向けて研究報告会を実施いたしました。その際、平安高等学校の先生方より、平安高等学校プログレスコースの各教科(国語、社会、数学、理科、英語)の取り組みを詳しくご紹介いただきました。詳細は当日の資料をご参照ください。資料は大学教育開発センターや高大連携推進室にありますのでご希望の方はお申し出ください。

今般は、平安高等学校教頭の高井市之助先生に、研究報告会を終えてということで原稿執筆をお願いいたしましたのでご紹介させていただきます。

|指定プロジェクト「高大連携」 |研究報告会を終えて

平安高等学校 教頭 高井 市之助

昨今の社会の変化は早く、それに呼応して生徒・保護者の学校に対する期待や要望も変化してきています。私達は平安高等学校が地域・社会で望まれることとはなにかを的確に把握し、これからの目指すべき姿はどのようなものであるかを明確にしなければなりません。目標が明確でなければ、教員集団が力を合わせて進む事もできませんし、この変化の早い社会では時代に取り残されてしまうことになります。新しい制度が出来るまでの過去10年間、私達は社会に対する見識が甘く、対応が遅れたために学校の教育活動が停滞してしまいました。そして、それが地域社会・生徒・保護者からの評価を得ることができずに、受験生、入学者減という形で如実に現れ、結局それがまた教員の活力を低下させるという悪循環を生み出していた事に気が付きました。

そこで、2003年度より始まった新課程を機に、龍谷大学との連携を軸にして、新カリキュラムの設定、共学化、2学期制等数々の新しい試みを実施してきましたが、特にSUT(ステップアップテスト)方式は、おそらく他の高大連携では見られないような画期的なシステムであろうと思います。

このSUT方式は単にテストの回数を多くし、補講を



深草学舎21号館で。

重けりトてね標しとのんに毎を、はならせ成、い生テラーをではらればりにかけたのとはではいい生かがは、い生がある。当回到にトがのがある。



配布された資料に目を通す参加者。当日は約60名参加。

せることが目的であると勘違いをした担当者もおりましたが、修正を加えながら労力を惜しまず地道な努力を積み重ねている最中であります。また、予想平均点を事前に出し実際の結果との誤差が生じた場合、その原因を分析し問題点をまとめることを教員には義務付けるようにしました。これにより、各自が自分の授業を常に振り返り、指導スキルの向上につなげるよう促しています。

こうしたシステムを機能させる上で大きな支えとなっているのが、各教科のWG (ワーキング・グループ) に於ける龍谷大学の先生方のご協力であります。高校生として身につけるべき基礎学力とは何か、という議論からスタートし、テスト問題の質や量についても忌憚のない意見を頂戴しております。従来は、ともすれば独善のない意見を頂戴しております。従来は、ともすれば独善の的ない方でありましたが、違った視点や観点からその構造上のゆがみや欠点を指摘していただけることは、大変ありがたいことであります。大学と高校の教員が同じ土俵の上で、生徒の現在と将来について活発に意見を交換することなど、そうあるものではな野に意見を交換することなど、そうあるものではな思います。さらにはお互いの授業を公開し、相互に実情を学び合った教科もございます。今後このような交流を一層発展させ、その中身を深めていきたいと思っております。

平安高等学校(京都市下京区)とは…?

1876年(明治9年)に浄土真宗本願寺派の寺院の子弟を教育するために開校。2003年(平成15年)より男女共学化、2学期制を導入し、プログレス、クリエイト、アスリートの3コースを展開。現在、本学との教育連携を進めている。詳しくは http://www.heian.ed.jp/

Facfid 酒 動 紹 介

教育改善のために様々な取り組みが行われています。

経営学部

経営学部におけるFDへの 取り組みについて

経営学部助教授 細川 孝

この間のカリキュラム改革

経営学部では、教育体制見直し委員会(故大杉賢明委員長:1997年度設置)以来、5つの委員会を設けて、教学改革の議論を積み重ねてきました。その問題意識は、「学生実態にいかに対応し、教育内容を高めていくか」という点で共通しています。

ここ最近に具体化されたカリキュラム改革としては、 ①専攻基礎科目の開講(2001年度から)、②総合演習・ 専攻演習の開講(2002年度(2001年度入学生)から)、 ③専攻科目2単位化の実施(2003年度入学生から)の3 つがあります。これらの改革は、低学年時からの基礎 的教育を充実しつつ、演習を通じた履修指導を行い、 系統的履修を促進しようとするものです。

2005年度からは、カリキュラムのねらいである進路 意識形成との連携を強めるように、キャリア関係の科 目(マイキャリアデザイン)を配置するとともに、2、3 年次生を対象とした学部独自のキャリア講演会を開催 しています。キャリア形成科目については、「マイキャ リアデザイン」の発展科目として、2006年度から2年次 生を対象とした将来の職業選択に結びつく科目を2科 目開設することになっています。

FDに関する具体的取り組み

一初年次教育、教育補助員、入学前教育

このようなカリキュラム改革とあわせて、次のような取り組みも進めてきました。

まず、1回生前期に開講されるフレッシャーズゼミの 共通テキスト(『フレッシャーズ・スタディガイド』) を作成し、大学入門科目としてのフレッシャーズゼミ の授業内容の標準化を進めています。共通テキストの 初版は20年近く前に作成されており、現在のテキストは、 2001年に全面改定したものです。

そして、1回生入学時の全学共通の情報基礎教育に加えて、学部独自の情報基礎教育を行っています。これは、2004年度まではフレッシャーズゼミにおいて行われてきたものを、2005年度においては、一律に実施するのではなく、補習授業として、希望者を対象に行うよう改めたものです。高等学校において、「情報」を履修する学生が増えてきていることに対応しました。

さらに、必修科目である「簿記入門」「現代の企業会計」において、クラスの少人数化を図り、教育補助員を活用しています。これらの科目では毎回、課題やレポートを提出させるなどしており、教育補助員の存在は不可欠です。教育補助員の業務は、①教材の配布、②提出物の回収・整理、③授業中における学生の実習に関するアシスト(解法を教えるのではなく、解法に関する助言、すなわち教員の学生に対する指示の内容が学生に理解できているかの確認と徹底)です。教育補助員の採用条件は、2回生以上の学生で、日商簿記検定3級以上の資格(能力)を有することとなっています。授業の前の打合せと、授業の後の反省会を行い、担当教員と教育補助員の連携を密にしています。

加えて、2006年度から、これまで教育連携校推薦入試の合格者に対して行ってきた入学前教育(入学時までの課題を課し、入学後にフレッシャーズゼミにおいて指導を行う)を、関係校推薦入試、課外活動選抜推薦入試の合格者にも拡大することになりました。経営学部における入学前教育の位置づけは、入学後の学修に興味・関心を持ち、意欲的に取り組んでもらうために、企業・経営を中心とした幅広い問題に関する学習機会を提供するというものです。具体的な課題は、推薦図書を精読しレポートを提出するというものであり、「読み、考える力」そして「考えをまとめる力」を身につけることを目標にしています。

◎当面する2つの課題

これらの取り組みを進めてくる中で、次の2つの課題を認識するようになりました。

まず、経営学部の5つの最低到達目標との関わりです。 経営学部では、次のような最低到達目標を掲げています。

- 1) 建学の精神を理解し、社会人として通用する素養と倫理観をもつ。
- 2) 自分の考えを文章で表現し、それを発表し討議する能力を身につける。
- 3) 基本的な財務諸表類を読み、会社の概要を説明できる。
- 4) 広く国際感覚を持った社会人としての素養と語学力を身につける。
- 5) 学修した専門領域での知識を切り口に現代企業の特徴を説明できる。

このような明確な教育目標を持っているわけですが、 それぞれの目標をどう具体化し、その達成度をどのよ うに評価し、カリキュラム改革にフィードバックするか、 という点での議論は、残念ながら残されたままです。

そして、経営学部における大学評価への取り組みです。 教学創造とそこにおける教職員の果たすべき役割について、真剣な議論を進める中で、学部教授会において「評価システム」を自主的に検討する場を設定することが確認され、近く発足の予定です。今後、社会に対する 説明責任を大学人自らの主体的な営みとして果たして いきたいと考えているところです。

教務委員会では、12月1日、2日に岡山大学と山口大学を訪問し、FDの積極的な取り組みを学んできました。また、拡大教務委員会において、「長期的・総合的観点からの経営学部のカリキュラム構築」について検討します。教務委員会と拡大教務委員会、そして教授会の積極的な議論を通じて、引き続きカリキュラム改革をめざしているところです。

国際文化学部

国際文化学部のFDへの 取り組みについて(私の試み)

国際文化学部助教授 カルロス、マリア・レイナルース・D

国際文化学部では、専任教員の4割が外国人です。 出身国が違っていれば、教え方も様々で、出席を重視 する教員もいれば、試験に合格すれば単位を与える先 生もいるようです。また、授業中に質問して誰かに当 てる先生もいますし、講義形式でずっと授業をする先 生もいます。日本人の教員の間でも教え方が違うかも しれませんが、多文化の中ではこのような違いがより はっきりしており、「多文化」教育の特徴のひとつと言 えるでしょう。

私は本学に着任して3年経ちましたが、今でも、最も効率的な教授法を模索中です。ご存知のように、外国人の教員の多くは日本語のハンディーがあります。つまり、日本語で専門知識をどのように学生に分からせるのかは毎日の課題で、試行錯誤の繰り返しです。ここで、私の工夫とその成果についてお話したいと思います。

まずは、日本語の工夫についてですが、話す・聞く・ 書く・読むと言う語学スキルが教員に求められています。 話すことばはどのようなものが望ましいのか、敬語を どの程度使うのか、標準語を使うのか、親しみやすい ローカルな方言を使うのか、学生に分かりやすいこと ばはどんなものなのかなど、日本人の教員は簡単に見 極めることが出来そうですが、私たち外国人にはなか なか難しいものです。私の場合、経済学系の科目や基 礎演習、プレ演習、演習を担当しており、年に1科目 以外は全部日本語で教えています。なるべく標準語で、 「一ですます」形を使って、文を短く、ゆっくり説明し ながら授業を進めています。また、日本語で書くことも、 漢字系出身ではない私には難題です。着任したばかり のころ、レジュメとパワーポイントを毎回用意し、そ れに沿って授業をしました。黒板に字を書かなくても 良いし、何も講義ノートを見なくてもスムーズに授業 が出来ましたので私にとって便利でした。しかし、学 生はパワーポイントに書かれているものを丸写しする という作業に追われ、授業そのものをまるで理解して いない、さらには、そのまま学生にレジュメを渡すた めそれに頼りすぎてあまり講義に出なくなったり、居 ても聞かなくなったりすることが判明しました。だから、 最近はパワーポイントをあまり使わないで、レジュメも最小限にして、代わりに変な字(今でも、字や書く順が間違っていたりしますが)ででもなるべく黒板にたくさん書くようにしています。そして、学生にノートを取らせています。そうすると、前に比べて、学生は授業の内容を良く聞くようになったと思います。

試験を作成するのも工夫が要ります。ネイティブチェックも入れて試験問題に誤解を招かないように慎重に作ります。また、採点する時は、なるべく時間をかけてゆっくり読んで、学生の言いたいことを理解しようとしています。そして、分からないところや間違っているところを解答用紙にコメントとして書いて、なるべく返却して確かめてもらいます。つまり、日本語が通じなかったせいで学生が不利を受けることのないように努力しています。(しかし、最近の日本人大学生は、日本語も文法も間違っていてロジックに欠けているので理解するのに大変です。)

専門科目を教えることについてですが、日本語能力の問題よりも私にとって大変challengingなことです。なぜなら、国際文化学部では「経済学」と聞くだけでアレルギーにかかる学生が多いです。これは、「経済学」がどのような科目で、自分たちの生活にどのように関わっているかの相関が見えないことに起因していると考えられます。ですから、初回の授業は必ず「経済学」の知識と今現在のダイナミックな世界との関わり、具体的には就職活動との結びつきを主眼において展開していきます。そうすることによって、経済学に興味を持つようになり、「我慢」して授業に出ると期待しています。また、シラバスに沿って、科目全体の流れ、講義の形式、評価基準・方法のような、経済学で言えば「教員」と「学生」との間の契約内容も述べて、この授業で「何が待ち受けているのか」を認識させます。

実際の授業の進め方ですが、経済学では、「分析ツー ル」を教えることは大事です。つまり、学生に分析の 枠組み・方法を教えさえすれば、自分でいろんな場面 で登場する経済現象を分析できると信じています。授 業を3段階にわけて、実際の経済現象を紹介し彼らの 興味を引く。そして、それをことばでまず経済概念や 考え方、理論に関連させて説明し、全体のイメージを 作ります。次に、図や表、(時間が許せば、数式でモデ ル化する)を用いてその概念や理論を展開し、さらに、 世界、特にアジアの発展途上国で起きている経済現象 を例として取りあげます。最後に、計算問題を出したり、 小テストや課題を与えたりして、学生の理解度を確認 します。ここで最も重要なポイントは学生になるべく 身近なものだけでなく、世界で起きている様々な現象 を例にとって授業を進めることです。また、100分間ず っと講義をすると、学生は疲れて集中力が衰えるので なるべく途中で5分ぐらいの余談を入れたり、20分間ぐ らいの映像資料を見せたりします。

確かに外国人教員は日本の大学で教えるのは大変です。 学生も外国人の先生の教え方になれないときっと大変 だと思います。が、これは異文化にふれあう大変良い 機会であり、国際文化学部でいう「幅広い視野をもち、 国境を越えて活躍できる人材」の育成につながると確 信しています。

《教員対象》パソコン講習会開催

教員のパソコンスキルの向上を目的とした「パソコン講習会」を深草学舎で開催いたします。参加費は無料です。 まだお申し込みでない方はぜひご参加ください。詳しい案内は、大学教育開発センターにあります。

コース名	講習日時	講習場所	募集定員
コンピュータ基本操作講習	2 月 14 日 (火) 2·3·4講時		
MS Word(応用編)講習	2月16日(木) 2·3講時	深草学舎 30名 5号館 401教室	30名
PowerPoint講習	2月21日 (火) 2·3·4講時		希望者が多く、さらに開催日を設定することにしました。詳しくは大学教育開発センターまで。
PowerPoint素材作成	2月23日(木) (定員に 2・3・4講時 (達しました)	深草学舎 5号館 403教室	5名

※2講時/10:45~12:15 3講時/13:15~14:45 4講時/15:00~16:30

- 講習担当者/情報メディアセンタースタッフ等
- 申込締切/2006年2月10日(金) いずれも申込先着順
- 申込方法/① 希望するコース ② 氏名 ③ 所属学部(非常勤はその旨) ④ 連絡先(電話・E-mailアドレス等)
 - ⑤「Dreamアカウント」の有無(情報処理実習室を利用される際に必要なアカウントです。 無い場合は発行いたします。)をお知らせください。
- 申 込 先/大学教育開発センター事務部(内線1050、1051/DCHE@rnoc.fks.ryukoku.ac.jp)
- ※ すでに定員に達している場合はお申し込みができませんので、ご了承ください。
- ※ なお、飛び入り参加は出来ませんので、事前に必ずお申し込みください。

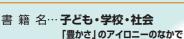


大学教育開発センターでは、セン ターの資料として図書を購入してい ます。貸し出しも行っていますので、 どうぞご利用ください。また、購入 図書の希望も募っていますので、こ 希望があればお知らせください。

書籍 名…教育改革 共生時代の学校づくり

著者名…藤田 英典 出版社名…岩波新書

ISBN4-00-430511-X



著 者 名…藤田 英典 出版社名…東京大学出版会 ISBN4-13-002066-8



書籍 名…大学の倫理 著 者 名…蓮實 重彦

アンドレアス・ヘルドリヒ 広渡 清吾

出版社名… 東京大学出版会

ISBN4-13-003321-2



『文学部を巣立つ人々に」 (龍谷大学文学部編)

2005年8月1日発行



文学部ではこれまでFD活動の一環と して、『分けると、分かる』(入学志望者 対象)、『学問と私』(1・2年生対象)、『卒 業論文と私』(3・4年生対象)という、 いわば「入口の手前から出口まで」のガ イドブックを作ってきました。本書はこ れらに続く「出口以降」のガイドブック として、文学部を巣立つ学生に対し「文

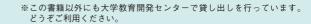


学部の学問は社会に出てから役に立つのか?」という問いかけの もと、卒業生と教員が学びの意義を綴ったものです。

本書にはシンガーソングライターになった真宗学科卒業生、刑 務官になった仏教学科卒業生、ジュエリーアドヴァイザーになっ た哲学専攻卒業生などからのメッセージが収録されており、文学 部での学びが卒業後の人生の「実学」になることを証明してくれ ています。卒業生たちは、社会人として問われるのは職業ではな く人間であると実感し、文学部での学びを礎に、実に深いところ で自分自身をみつめ人間をみつめています。

役に立つ学問とは? 真の社会人とは? 大学教育とは? い ろいろ考えさせられる一冊です。

※これまで文学部が作成した小冊子をご希望の方は、教学部(文学部) または、大学教育開発センターまでお問い合わせ下さい。



教育研究·開発機能

2006年度 大学教育開発七沙分一事業計画

■学生による授業評価調査(授業アンケート)の実施

アンケート内容の充実を図り、2005年度からは、第1学期(前期)、第2学期(後期)ともに実施することとなりま した。学生からの意見を聴く貴重な機会を有効活用し、授業改善にお役立てください。

■マークカードを用いた自動採点・成績管理ソフト「SSくん」の利用促進

授業中の小テストやアンケートの回答にマークカードを用いると、マークリーダー・自動採点ソフトの利用により、 採点や集計に係る時間が短縮されます。よりサポート体制を強化するため、「SS くん」を情報メディアセンターに移設 予定です。情報メディアセンターと連携し、より多くの先生方に有効利用していただけるよう推進に努めます。

■自己応募プロジェクト事業

教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループに対し、授業・教材等の研究開発を奨励し、経費面での 支援を行います。研究開発成果は報告書の作成及び研究発表会により報告されます。

■指定プロジェクト事業

大学にとって必要な教育開発研究を行い、より教育効果の高い教育を実践するための基盤づくりを進めることを目的 として、大学教育開発センターが指定する教育開発に関するテーマについて研究開発を行うプロジェクトです。 2006年度のテーマについては、現在検討中です。

■教育職員の新任者就任時研修会の実施

龍谷大学に初めて着任された先生方を対象に、龍谷大学の教育理念をはじめ、本学での教育研究活動に必要な事項に ついての研修会を行うとともに、大学教育開発センターに関わる先生方との懇親を図ります。

■教員対象パソコン講習会の実施

パソコンを使うのは苦手という先生方からスキルアップをしたい先生方まで、ワープロ・表計算ソフトの基礎から専 門分野で利用するソフトの使い方まで、いくつかの講座を開講します。毎年度、9月と2月に開講していますので、年々 スキルアップが可能です。

■FDサロンの開催

月1回を目安に、教職員間の交流の場として開催します。毎回異なる先生に、話題提供をお願いする予定です。2006 年度も、お茶を飲みながら自由な雰囲気で意見交換できればと願っています。

また、より多くの方々に内容を知っていただくため、『FDサロンリポート』を発行します。

■FDに関する講演会・セミナー、FDフォーラムの開催、学生との交流

FD活動をより深めていくために、学生との交流や、講師を招いて開催する FD フォーラム等の開催を予定しています。 また、他大学や他機関で行われるセミナー等の情報収集も行い、FD 活動のさらなる啓発機会を提供したいと考えてい

■公開授業と事後研究会(講評会)

他の先生の授業を参観することによって、「なるほど」と思えることも多いようです。教室での工夫を見せあう場と して2006年度も開催を予定しています。自分の授業と照らし合わせながら、さらに事後研究会の講評会で、自由に意 見交換ができればと願っています。

■大学教育開発センター通信・大学教育開発センターNewsの発行

大学教育開発センターでの取り組み、FD (Faculty Development) に関すること、学外での研修会やフォーラムの案 内など、大学教育開発センターの活動記録として、センター通信は年3回、センター News は情報の鮮度に対応し随時 発行します。

■大学教育開発センターWebの充実

学内外に、大学教育開発センターの活動を知っていただくため、Web のさらなる充実を図ります。

■大学教育学会団体会員

大学教育の一層の充実発展を図ることを目的とした「大学教育学会」に、団体会員として入会しています。現在、学 士課程教育と教養教育について、様々な観点から論議されています。情報を入手し提供に努めます。

I. N. F. O. INFORMATION T. I.

[2005年度] 指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会

下記日程で研究報告会を開催いたします。参加申し込みの必要はございません。 関心のあるテーマのみ参加していただいても結構です。みなさまの積極的なご参加をお待ちしております!

●開催日時

2006年3月14日(火)9:30~16:30~

16:45より 意見交換会

深草学舎 21号館 404·405·407·408教室

●発表者

2005年度 指定プロジェクトメンバー (全4プロジェクト)

2005年度 自己応募プロジェクトメンバー (全14プロジェクト)



2004年度指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会(2005年 3月15日・深草学舎)の様子。

17:00より 情報交換会

(財)大学コンソーシアム京都 第11回FDフォーラム

●テーマ「これからの大学教育」

●開催日時・会場

1日目 2006年3月11日(土)12:00~17:00 京都外国語大学 森田記念講堂 2日目 2006年3月12日(日) 9:30~15:30 キャンパスプラザ京都

●申込方法

大学教育開発センターでお申し込みの取りまとめは行いません。 各自で『申込フォーム』(http://csvr9.consortium.or.jp/fd-cgi/) からお申し込みください。

◆申込締切

2006年2月10日(金)

●参 加 費

フォーラム参加費 3,000円 情報交換会参加費 2,000円

◎ただし、専任教員につきましては参加費用を大学教育開発センターで負担いたします。

※詳細については、大学コンソーシアム京都のWebをご覧ください。

http://www.consortium.or.jp/consortium/fd/index.html

※なお、2日目の分科会は応募多数の場合、ご希望にそえない場合があります。あらかじめご了承ください。

京都大学高等教育研究開発推進センター 第12回大学教育研究フォーラム

●開催日時

2006年3月27日(月) · 28日(火)

◆会

京都大学 吉田南1号館 百周年時計台記念館

※それぞれの詳細につきましては、「大学教育開発センターNews」等でお知らせいたします。 また、主催者による各案内が大学教育開発センターの掲示板にありますので、ご覧ください。

◆編集後記

本号で『大学教育センター通信』(以下『通信』)も、センターの活動を伝えて第11号になりました。『通信』は、単にセンター の活動をみなさまにお伝えするだけではなく、高等教育のあり方や問題を読者の皆様に考えていただくための材料を提供する役 割も担っていると考えております。

今回も、第1回の龍谷大学FDフォーラム、平安高等学校との教育連携報告会、公開授業、授業アンケート結果の見方について、 他大学訪問の報告など、いずれも内容的にFD活動として論議をしていただくに相応しいものとなっています。『通信』の記事か ら、学内のいろいろな場所でいろいろな時に教育の話題が起これば、それは編集責任者として望外の喜びです。

最後になりましたが、『通信』にご執筆をいただいた方々にこの場を借りまして、お礼を申しあげます。

大学教育開発センター長 近藤久雄